平成元年７月

くすり博物館だより

〒501-61 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・*Phone*: 058689-2101

第21号

湯浅四郎氏寄贈資料展

～錦絵。引札。紙看板～

1989.7.25～9.24

当博物館は、昭和46年の開館以来、多くの方々のご指導・ご協力をいただいております。おかげ様で収蔵資料も４万2000点を数えるまでに充実し、展示・保存・研究をさせていただいております。

今回の特別展では、湯浅四郎氏より寄贈いただいた貴重な資料・総数410点のうち、錦絵・引札紙看板を中心に展示いたします。紙上では、そのうちの何点かをご紹介いたします。

▲薬種売薬煙草石油
その他いろいろ
大正／36.0×23.1

登龍丸▶
江戸／38.3×24.6
（時代／大きさ・センチ）

女宝円▶
明治／25.5×69.5

湯浅四郎氏プロフィール

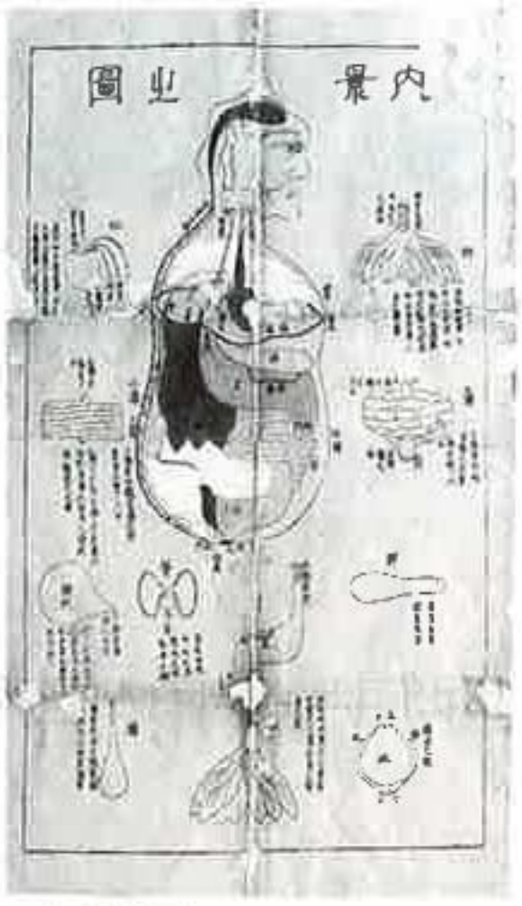
明治32年 茨城県那珂湊市のお生まれ。
大正13年、名古屋市にて、繊維機械部品製造の湯浅糸道工業を創立され、現在は顧問。
古文書・美術工芸・文学・音楽などに造詣が深い方で、文化と生活にかかわる資料を幅広く収集・研究しておられます。
種々廼舎（くさぐさのや）文献資料蒐集研究所、同気会々長。

♧寄贈いただいた資料♧

神農画像・白沢の図など信仰資料12点、側人経穴之図・徳川慶勝夫人御容体書など医学関係資料15点、朝熊山万金丹資料19点、種痘済証・虎列刺病患者病因調査表など保健衛生関係資料41点、売薬請売約定書・売薬請売免許之證など薬業資料51点、かまやくすり屋店の図・ちちのくすりなど錦絵17点、千金丹・清快丸・胃散などちらし広告26点、広告暦５点、その他資料145点

秘伝活幼全書・産論翼など書籍79点

総数　410点



▲内景之図
江戸／32.0×55.0

上　菓子砂糖商　松本為助
明治／37.6×26
下　醤油　須崎悦興
▼　明治／37.6×26

◀富山絵
義経千本桜
江戸／23.1×36.0

▲富山絵　忠臣蔵
明治／24.3×17.2

安住かとりせん香▶
明治～大正／
44.1×162.5

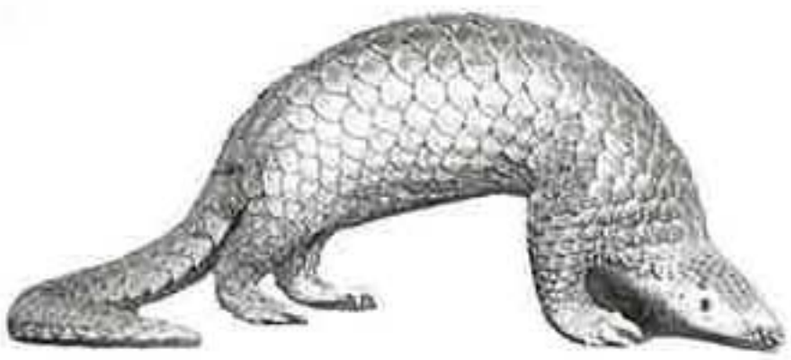
▲カバン屋　土崎屋清之助
明治35年暦付
明治／37.3×25.4

◀右　発泡
明治／26.0×69.5
左　小児健全洗嚢
明治／25.0×63.7

●新収蔵資料●

♧前川久子様よりセンザンコウ

センザンコウは、アフリカ・アジアなどに棲む哺乳類で、体が鱗(うろこ)でおおわれているのが特徴です。夜行性で歯がなく、長い舌でアリやシロアリなどをなめてとります。体の鱗は危険な目にあうと体を球形にまるめ、身を守るためのものです。前川様寄贈のものは体長約90cmのもの。その鱗は鱗鯉(りょうり)・穿山甲(せんざんこう)と呼ばれ、催乳剤として使われます。



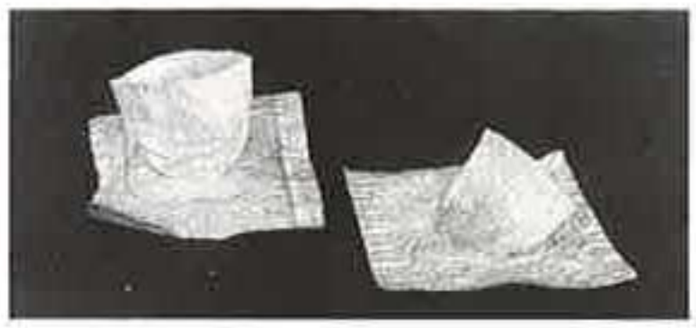
♧韓国製百味タンス購入

1870年頃の韓国製の百味タンス。高さ約1m、横巾が90cmの木製です。1つの引き出しを2つに区切ることでより多種の生薬が収納できます。

♧紙製の氷のう

神戸市の柴田保彦様に、大変珍しい紙製の氷のうをいただきました。大きさは、約14センチ角。戦時中、ゴムが手に入りにくくなったため、紙製の代用品が作られたのでしょう。これは終戦直後、柴田様のお父様の薬局で販売をしていたもの。

中に水を入れ、試してみたところ、老化しているためか、または、使い方が間違っているのでしょうか、水が少しずつしみ出してきます。この氷のうについて作り方、使い方などご存知の方は、ぜひお教え下さい。



くすり事始(7)

くすりの神様 少彦名命

日本書紀に「大己貴命（おおなむちのみこと＝大国主命）と少彦名命（すくなひこなのみこと）が力をあわせ、心を一にし国をおさめ、人びとや家畜の病気の治療法をさだめ、獣や昆虫の害を払うまじないを教えた。このため万民に至るまで、その恩恵をこうむっている」とあります。

このことから、大己貴命と少彦名命の2柱の神を薬祖神・くすりの神様として崇敬するようになりました。

薬の問屋街として有名な大阪の道修町・京都の二条・名古屋の京町・東京の本町には、それぞれ少彦名命をおまつりした神社があり、毎年秋には薬祖神祭を盛大に行っています。

日本で最古の薬方書に、大同類聚方（だいどうるいじゅうほう）があります。これは、大同3年（808）、天皇が各地に伝わる有名な薬方を報告させ、編纂した100巻からなる書です。現存する写本は江戸後期のものといわれていますが、この薬方の中には大己貴命・少彦名命の神方であると書かれたものが少くありません。

ところで、スクナヒコノクスネ、スクナヒコグスリという薬草があります。少彦名の薬根、少彦名薬という意味です。この植物はラン科のセッコク（石斛）のことですが、少彦名がこの薬草を用いて多くの人を治療したことからついた名といわれています。健胃・強壮の薬効があり、長寿をもたらす薬ともいわれました。

わが国の医学・薬学は中国からもたらされたものが多いことから、漢方医や薬屋さんは古くから中国の薬祖神・神農(しんのう)もおまつりしてきました。神農は草木を口でかんで薬効を確かめ、人々に薬になる植物、毒になる植物を教えたといわれます。

少彦名命 ▶
高山いちい
一刀彫の名匠・
松田亮長の作。
高さ15.5cm

薬草豆知識

マラリアの特効薬
キ　ナ

キナは南米熱帯産の樹木で、その樹皮からとるキニーネは熱病、とくにマラリアの特効薬として知られているもので、19世紀に入ってヨーロッパ各国は熱帯アジアにある自国領土で栽培に力をそそぎ、オランダがジャワ島で栽培に成功したものです。

一方、マラリアは18世紀末ごろまでの長い間、ベールにつつまれ恐れられていた熱病です。キナの樹皮が熱病に効くことをヨーロッパの人々が知ったのは17世紀中頃ですが、当時は医学会の反対や、宗派の対立などで、キナ皮の普及が長い間はばまれていたためのようです。使われるようになったきっかけは、熱病を治すことで有名になった医者が、キナ皮を用いていたことが判ってからです。

○キナ発見にまつわる話○

「アンデス山中で現地人が熱病にかかり苦しんだ時、溜り水を見つけてその水を飲んだところ、渇きをいやしただけでなく、回復して無事家にたどり着くことができた。この不思議な体験を人々に伝え、その溜り水を調べたところ、その水の中には一片の木片があり、その木片の苦味が熱病に効くことを確かめた…」という話。この話はインディオに伝承されておらず、後世の人の創作のようです。

○キナの学名の由来○

17世紀の話で、スペインのペルー総督キンコン伯爵(Chinchon) 夫人がリマ市で熱病にかかったとき、侍医がキナ皮をとり寄せて服用させたところ、夫人は回復し本国へ帰国する際にキナ皮を持ち帰り、ヨーロッパに紹介した、というのがあります。これも実際にあった話ではないようですが、キナの学名のキンコーナはこの話にちなんでつけられました。

（薬用植物園　白井　英夫）

とぴっくす

▶昨年度の来館者４万人

昨年度の来館者数は、39,962名と昭和46年の開館以来、最高を記録しました。一昨年度より約3,000人の増加です。

海外からのお客様も、年間約350人・46ヵ国の方々をお迎えいたしました。

▶第４・５回植物画講座

去る４月23日と７月15・16日に、恒例となりました植物画講座を開催。画材はオキナグサ、クサノオウ、ヤブカンゾウなどの薬草。この講座も回を重ねるごとに２度３度と参加される方が多く、腕前もずいぶん上達されました。次回は11月を予定しています。

▶樹齢15年・高さ４メートル

香木、薬木として有名なビャクダン。熱帯地方では、定植後７～８年でその材より良い香りがするようになるとのことですが、当薬草園のビャクダンも、温室育ちながらほのかな芳香がするようになりました。樹齢15年、高さ４ｍに育ったビャクダンは、わが国では一番大きいのではないかと思われます。

▶「江戸時代におけるくすり・医・くらし」発行

江戸幕府の財政に関する政令法規を集めた「徳川理財会要」の中から、くすり・医・くらしに関するものを抜粋したものです。当博物館創立・運営企画委員を経て、現在顧問の田辺普編・320頁・B5版。医学史、薬学史研究者の方、その他この領域に興味をお持ちの方にご利用いただける内容です。

残部がなく、お分けすることはできませんが、貸し出しはいたしますので、お申し出下さい。

資料寄贈者

飯塚一雄　一色　玄　岩崎鐵志　上野益三
大槻　彰　片桐棲龍堂　木股喜代次郎　京極三朗
柴田保彦　杉本茂春　添川正史　田邊源三郎
田邊　普　竹内孝一　滝本正一　豊田勤治
豊田久次　橋爪勝次　橋本庸平　濱中　修
逸見誠三郎　本間尚次郎　前川久子　松浦薬業㈱
前嶋高蔵　三口清次郎　宮田親平　森田愛作
安井　広　山下愛子　山本　平　湯浅四郎
葉　庚亮　吉井千代田　渡辺澄江　（敬称略）

ありがとうございました

♧人事消息

退職　吉本　直美　学芸員
採用　野尻佳与子　学芸員・司書

館長 **青木允夫**　学芸員 **森部裕子**(編集担当)，**稲垣裕美**　学芸員・司書 **野尻佳与子**　庶務 **川瀬麻起子**　説明員 **高橋千寿**
薬用植物園 **白井英夫**　研究員 **逸見誠三郎**
くすり博物館　9:00～16:00開館（毎月曜日・12月29日～１月８日　休館）